

## 討 論 記 録

北海道立文書館 吉田 千絵

記録史料情報管理論研究会による自由テーマ研究会「国際文書館評議会 (ICA) 作成の記録史料記述の標準化と電子記録の保存ガイドについて」は、前半を青山報告、後半を安澤報告とし、報告終了後にそれぞれについて質疑討論を行った。

前半では、情報としての記録史料を制御するためには、記録史料そのものの情報と、メタデータ (作成主体に関する情報・記録史料の発生の経緯に関する情報などの「群」としての情報) の両方を考えていかなければならない、ということを指摘し、現在の標準化の動向について、ISAD(G)・ISAARの紹介を中心に報告された。

青山報告に関する質疑応答は以下の通り。

### 質問

丑木氏 (国立史料館)

媒体に関する情報は、青山報告ではメタデータととらえていたが、むしろ記録史料そのものに関する情報という側面が強いのではないか。

### 回答

基本的には電子記録を念頭において考えた。電子記録では、フロッピーディスクなどの媒体の種類に関する情報はものとしての情報と考えられるが、その中にどのような形で書き込まれているか、というような情報はやはりメタデータではないか。

紙媒体の資料についても、例えば紙の材質などの情報はメタデータと考えた方がよいかと思っている。いずれにしても不十分な点なので、今後の検討課題としたい。

### 質問

吉田氏 (埼玉県立文書館)

日本の文書館界におけるオーソリティー・コントロール確立の見通し及び日本の状況や資料



にあった国内標準の必要性についてどう考えるか。

### 回答

オーソリティー・コントロールに関しては、日々の記述作業を、メタデータを意識して行っていくと同時に、まず近隣の数館で情報交換を行うといった小さなところから始めた方がよいのではないか。

日本の国内標準の必要性については認識している。記録史料情報管理論研究会では、記述のサンプル作成などの作業を行っており、今後オープンセミナーも企画しているので、ぜひ参加していただきたい。

ただひとつ、マニュアルさえあればそれでいい、という考え方は非常に危険であることを指摘したい。マニュアルをささえる考え方をしっかりさせなければならない。

その他、箱館奉行文書のサンプルが見たい、という希望があり、昼休みを使ってデモンストレーションが行われた。

後半では、「メタデータ」をキーワードにして、ICA作成の電子記録の保存ガイドの紹介があった。証拠性をきちんと保ちながら電子記録を残していくために、現用の段階から、アーキビストが積極的に関与していかなければならない、ということが強調された。

質疑応答は以下の通り。

### 質問

所澤氏 (群馬大学)

電子記録にメタデータをつける、という作業は、アーキビストの領域を越えており、むしろ

現用段階での文書作成者・文書管理者にとって必要なことではないか。この点について、欧米の状況はどうか。

#### 回答

アメリカのNARAはレコード・マネジメントの業務を含んでいるし、イギリスなどでも、アーキビストの権限は現用記録の管理にまで及んでいる。アーキビストは現場に対してもっと指導性を発揮しなければならない。

#### 質問

##### 保坂氏（個人会員）

ISAD(G)の記述要素や、電子記録のメタデータを見ると、メタデータの中にはアーキビストにしかかけないものもあるということを確認したい。

最後に、青山氏から以下のコメントがあった。

メタデータをつける作業に関する質疑応答に関して、ICAの電子記録ガイドは、記録史料を